

五泉市 のこぎり屋根工場調査研究

—機織産業の隆盛を今に伝える工場調査・活用提案—

A2201624 細田 恵理

研究の背景

新潟県五泉市は、以前は織物産業によって、名のある産業地として発展していた地域である。五泉市で見られる鋸の形状の屋根のついた建物は、のこぎり屋根工場と呼ばれ、かつては各地の織物産業地で数多く見られるものであった。五泉市ではのこぎり屋根工場もほとんど取り壊されてしまっており、のこぎり屋根工場を以前のまま使用している機業場は五泉市では江口機業場のみである。現在の五泉市は織物を扱っている機業場も年々減り、わずか6件まで減少してしまった。その6件のうちの2件は後継者が見つかっておらず、五泉の織物業自体もどんどんと衰退する状況になってきている。

本研究はのこぎり屋根工場である江口機業場に協力して頂き、のこぎり屋根工場についての研究を進めていく。加えて、五泉市の織物産業の歴史を読み解き、五泉の織物産業についての理解を深め、のこぎり屋根工場の特性、今後の活用について提案する。

研究の目的

江口機業場は、昭和37年に建てられた木造洋小屋組ののこぎり屋根工場であり、過去に13回に渡る増改築を行っている。のこぎり屋根工場は木造が主流であるが、その分傷みやすく、古い建物である場合、建て替え、解体されてしまうことが多くあるため、現存しているのこぎり屋根工場で、今なお機業をしている機業場は全国的に見てもかなり珍しいと考えられる。

五泉ののこぎり屋根がなくなってしまうことにより、以前の地域を形作っていた伝統的・歴史的な建物があったという事実すら、新しい世代に伝わらなくなってしまう。それどころか、のこぎり屋根の記憶を知っている世代の記憶もどんどんと色褪せていく。私はこれも五泉の文化の記憶が失われてしまう因だと思い、後世に伝えていくための試みが必要だと考えた。本研究は五泉の記憶を保存することを目的とする。



機業場の様子

糸を巻く機械



特有の大きなポビン



研究のプロセス

事前調査

現地調査

提案構想

図面・模型
作成

論文作成

まとめ

完成作品

○論文

○模型

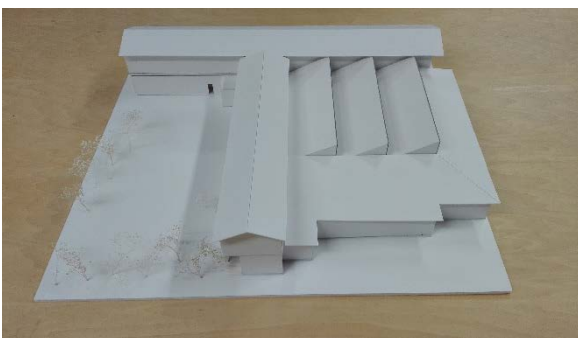
・軸組み模型(部分模型)

のこぎり屋根工場の特徴である採光面を 1/30 スケールで表現。模型を作って分かったことは、機業場部分である大空間を、わずかな柱で支えているということである。他ののこぎり屋根工場の窓部分は、大半が斜めであるが、江口機業場の窓部分は垂直であり、のこぎり屋根工場全体で見ても珍しいことも分かった。



・リノベーション提案全体模型

機業場全体を 1/100 で表現。今回は機業場自体を別の目的の建物に変えるのではなく、機業場自体の活動はそのままに、プラスアルファの経営を追加する、リノベーション提案を行った。記憶の維持を目的としている本研究であるが、資料の展示のギャラリーの他に、地域の人間に親しみ易い様、建物の一部を、のこぎり屋根の小屋組が見られるカフェや、実際に機業活動を見ながら行う体験スペースなどを設けた。模型表現では、空間を用途に分けて 3 種類に色づけすることによって、視覚的にわかりやすいものとした。緑はカフェや資料館使用の来客のスペース、黄色は機業を行うスペース、青は通路等の従業員と来客者共通のスペースとした。



考察

五泉は、京都から仕事を発注し、糸を撚ることで色の付いていない「白生地」という名称の織物を多く生産、その白生地を京都の染物屋に送っていた。元来織物の羽二重は織るときに横糸を濡らして作る。五泉の水は鉄分を含んでおらず、濡らした際にも糸が茶色くならなかった。このことにより五泉の織物産業は成立した。

江口機業も全国の機業と同じように、家内工業として発展した機業場である。のこぎり屋根で有名な群馬県桐生市などのようにアトリエ活動の場にすることも、のこぎり屋根を残す重要な手立てではあるが、家内一体型の機業場では、住人とのつながりも絶ってはいけないと感じた。そのため今回は、全体リノベーションではなく、一部のみのリノベーション提案を行った。